

飼料用米（玄米）は 肉用鶏飼料のトウモロコシを全量代替できる

我が国の畜産は輸入飼料への依存度が高く、国際飼料価格の影響を受けやすいので、輸入飼料を国産飼料に置き換えることで、国内における畜産物の安定供給を確保する必要があります。そこで、飼料の自給率向上に向け増産が推進されている飼料用米を肉用鶏飼料に活用するため、国産肉用鶏種「はりま」に対し、飼料用米で後期・仕上げ用の配合飼料中の2/3程度を占めるトウモロコシを代替した（100%及び50%）飼料を給与し、生産性及び鶏肉品質への影響について調査しました。

☆ 技術の概要

1. 肉用鶏飼料のトウモロコシを飼料用米（無粉碎）で全量代替し、後期・仕上げ飼料として29～60日齢に給与しても、飼料要求率には差はなく生産性には影響しません。
2. 飼料用米の配合割合が増えるとともに、皮膚、肉、脂肪の色の黄色度が低下し、脂肪は白く肉は赤味が鮮やかになります。これは、米を使うことで色素キサントフィルが減少するためと思われます。
3. 飼料用米を給与すると、鶏肉（もも肉）の脂肪酸組成が変化し、オレイン酸が増加します。これは、米に含まれるオレイン酸が移行したものと思われます。
4. 飼料用米を給与した鶏肉は、肉の食味（もも肉、蒸し焼き）の評価が有意に向上しました。これは、脂肪酸組成の変化が高評価に結びついたものと思われます。



写真1 飼料米配合飼料
(左)と通常飼料

写真2 むね肉の肉色

〔左：飼料米100%
右：通常飼料〕

写真3 もも肉の肉色

〔左：100% 中央：50%
右：0%〕

☆ 活用面での留意点

飼料用米は品種や栽培条件により栄養成分が異なるので、必要に応じて他の飼料原料で微調整し、成分（CP、ME、Ca、P等）を同等とします。詳細は、群馬県畜産試験場中小家畜研究係（TEL：027-288-2222）にお問い合わせください。

（日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男）